

乳幼児の栄養指導に関する研究

熊沢昭子・鵜飼美恵子・竹内邦江

An Investigation on the Nutritive Guiding Principle to Infants

By

A. KUMAZAWA, M. UKAI and K. TAKEUCHI

はじめに

乳幼児の栄養指導をしていく上で、母親の育児に対する姿勢についてみきわめておくことは重要なこととおもわれる。すなわち母親の関心が小児の心身両面からみた「健康」という基本的な面に向けられているか、あるいは単に未梢的な現象を追っているものかということである。

このような観点から母親の養育態度について現状を分析し、今後の栄養指導のあり方を考察するために本調査を行なった。

方 法

調査対象は名古屋市近郊のM町における幼児（2才半～3才半）をもつ130名の母親とし、面接による調査を行なった。

調査期日は昭和45年8月下旬とした。

結果および考察

1) 授乳法 (表1-1)

授乳法の内訳は母乳38.7%に対し、人工乳46.0%と混合乳15.3%であった。昭和45年乳幼児身体発育調査結果は（4～5カ月）母乳27.8%，人工乳48.0%，混合乳24.2%であった。

人工、混合法にした理由は、表1-2のとおりである。母乳不足が66%で半数以上を占めており授乳困難が8%，母親の疾病・体調が6%，未熟児が2%などであった。他に多忙、めんどう、人工乳の方が母乳より発育がよいとおもうが各1%みられるのは、小児の心身の発育・発達にとって最高の栄養である母乳の価値が忘れられていると推察される。したが

表1-1 授乳法

項 目	例数 n=130	百分率
母 乳	50	38.7
人 工 乳	60	46.0
混 合 乳	20	15.3

表1-2 人工、混合法にした理由

項 目	例数 n=80	百分率
母 乳 不 足	52	66
授 乳 困 難	6	8
母 親 の 病 気 ・ 体 調	5	6
未 熟 児	2	2
多 忙	1	1
め ん ど う	1	1
母乳より人工乳の方が発育がよいとおもう	1	1
そ の 他	12	15

表2 食欲の有無

項目	例数 n=130	百分率
食欲がある	84	64.6
食欲がない	41	31.5
むらがある	5	3.8

って母乳のよさを十分認識させる必要がある。

2) 食欲の有無 (表2)

「食欲がある」と答えたものが64.6%, 「食欲がない」と答えたものが31.5%, 「むらがある」と答えたものが3.8%であった。

本調査における食欲の無いものとは、母親が「こどもに食欲がない」と答えた小児について、食物摂取状況を2日間しらべ、その摂取量が少なかったものをいう。ここにおいてその数が30%余りみられることは、調査時期が夏期のために多かったものとおもわれる。

3) 乳の与え方 (表3-1)

きめられた時間通りに与えるすなわち「時間授乳」というのが47%で半数近くを占め、次に「ほしがったらすぐ与える」のが41.5%「ほしがったとき少し泣かせてから与える」のが11.5%であった。

表3-1 乳の与え方

項目	例数 n=130	百分率
時間授乳	61	47.0
欲しがったらすぐ与える	54	41.5
欲しがったとき少し泣かせてから与える	15	11.5

「時間授乳」の方法をとったものの理由をあげれば、「病院、助産所の指導を受けたからその通りに守った」「消化不良にならないようにした」「仕事の都合から時間をきめておくのが便利であるから」あるいは、「わがままな子にしないため」などであった。授乳を3時間おき、あるいは4時間おきにするのは、生理的に乳の胃内停滞時間からこのような時間配分をいうのは妥当である。しかし個人の欲求よりも一定の概念的な形式に固執して、権威者からいわれたことを絶対視して、個人差を考慮していないことがうかがわれる。また「わがままな子にしないため」からうかがわれるように「こどもは、条件づけられるものであるから、一定の学習が必要である」というワトソンの考え方に立っているといえよう。

表3-2 食欲の有無と乳の与え方との関連

項目	食欲ある n=81		食欲なし n=43	
	例数	百分率	例数	百分率
時間授乳	41	51	18	42
欲しがったらすぐ与える	31	38	19	44
欲しがったとき少し泣かせてから与える	9	11	6	14

χ^2 検定
 自由度=(2-1)(3-1)
 5%臨界値 5.991 > 0.89
 有意差なし

「欲しがったらすぐ与える」ものの理由は、「泣かせることがいやだから」「近所への気がね」「はじめてのこどもで様子がわからないから」などがあげられていた。「泣かせることがいやだから」や、「近所への気がね」にみられるように、こどもの泣くという真の意味が理解されておらず、大人側の都合が優先していることが問題点として指摘される。

「欲しがったとき少し泣かせてから与える」と答えたものの理由は、「運動になるから」「上の子の経験から少しぐらい泣かせてもよいとおもった」「自分で考えてそのようにした」という自己の経験に発したものがみられた。「欲しがったとき少し泣かせてから与える」のは、こどもの欲求を重視しており、その上にたつて、なお欲求に対する耐性を養なうという意味から最適であると考えられるが、このようにしているのは11.5%にすぎない。

食欲の有無と乳の与え方との関連は表3-2に示すとおりで、 χ^2 検定の結果、両群間に有意差は証明されなかった。

4) 発育と栄養との関連づけ (表4-1)

「栄養も大切だが運動、休息も必要である」と答えたものが41.5%、「こどもの自然の欲求を重視する」と答えたものが30%、「発育のためには栄養を積極的にとらせるべきだ」と答えたものが28.5%みられた。

表4-1 発育と栄養との関連づけの意識

項 目	例 数 n=130	百 分 率
栄養も大切だが運動、休息も必要である	54	41.5
子どもの自然の欲求を重視する	39	30.0
発育のためには栄養を積極的にとらせるべきだ	37	28.5

「発育のためには栄養を積極的にとらせるべきだ」という考え方からは、母親の栄養に対する関心が高く、栄養を十分に摂らせて大きくしたいという過度な期待がうかがわれる。これが押し進められていけば、食事をむり強いすることにもなりかねない。

表4-2 食欲の有無と発育・栄養との関連づけ

項 目	食 欲 ある n=84		食 欲 なし n=46	
	例 数	百 分 率	例 数	百 分 率
栄養も大切だが運動、休息も必要である	37	44.0	17	37.0
子どもの自然の欲求を重視する	31	36.9	8	17.4
発育のためには栄養を積極的にとらせるべきだ	16	19.0	21	45.7

χ^2 検定
 自由度=(2-1)(3-1)
 1%臨界値 9.210<11.521
 有意差あり

食欲の有無と発育・栄養との関連づけは表4-2に示すとおりで、食欲のある群では、「発育のためには栄養を積極的にとらせるべきだ」というものが19%に対し、食欲のない群では45.7%であった。

χ^2 検定の結果、1%以下の危険率で有意差が認められた。すなわち食欲のない群の母親には、さきへのべたように栄養に対する過度な関心を持たれており、その結果、食欲不振を誘発

しているとみることができよう。

ここにおいて、母親の誤まった関心をいかにして本質的なものに向けるかということが問題となろう。

5) 友だちに対する母親の不安感 (表5-1)

「悪い友だちを持ったり、いじめられるから不安におもっている」ものが20.8%であり「不安感のない」ものが79.2%であった。

表5-1 友だちに対する母親の不安感

項	目	例数 n=130	百分率
	いじめられるとおわない	103	79.2
	いじめられるとおもう	27	20.8

「不安感のある」ものの理由は、「悪い友だちのまねをして感化されるのではないか」「泣いて帰ってくるので心配」だといったものがあげられていた。なお「傷つけられるような気がする」といった極端なものもみられた。また「近所のトラブルの原因になることをおそれる」といったことも以外のことでは不安に思うものがみられることは問題となろう。

表5-2 食欲の有無と友だちに対する母親の不安感との関連

項	目	食欲ある n=84		食欲なし n=46	
		例数	百分率	例数	百分率
	いじめられるとおわない	68	81.0	35	76.1
	いじめられるとおもう	16	19.0	11	23.9

χ^2 検定
 自由度=(2-1)(2-1)
 5%臨界値 3.841 > 0.428
 有意差なし

食欲の有無と友だちに対する母親の不安感との関連は表5-2に示すとおりで、両群間に有意の差はみられなかった。

6) 友だちの選択についての母親の関与 (表6-1)

友だちの選択について、「子どもの好きなようにさせている」ものが74.6%、「友だちがいない」と答えたものが16.2%、「親が友だちを選び家へ連れてきて遊んでもらうようにする」ものが6.2%、「友だちを母親は知っている程度」が3.1%であった。

表6-1 友だちの選択についての母親の関与

項	目	例数 n=130	百分率
	子どもの好きなようにさせている	97	74.6
	友だちがいない	21	16.2
	親が友だちをえらび家へつれてきてあそんでもらう	8	6.2
	どんな友だちがあるか知っている程度	4	3.1

友だちを親が選択する理由は、「なるべく良い子と遊ばせ、良いことを学ばせたい」というものや「近所のこどもが悪いことばを教えるから」といった庇護的なものであった。

表6-2 食欲の有無と友だちの選択についての母親の関与との関連

項 目	食欲ある n=84		食欲なし n=46	
	例 数	百分率	例 数	百分率
子どもの好きなようにさせている	67	79.8	28	60.9
友だちがいない	12	14.3	11	24.0
親が友だちをえらび家へつれてきてあそんでもらう	3	3.6	5	10.9
どんな友だちがあるか知っている程度	2	2.4	2	4.3

χ^2 検定
 自由度=(2-1)(4-1)
 5%臨界値 7.815>5.95
 有意差なし

食欲の有無と友だちの選択についての母親の関与との関連は表6-2に示すとおりで、両群間に有意差は証明されなかった。

7) 規律正しきに対する期待 (表7-1)

表7-1にみられるように90%以上のものが、「規律正しき」を求めているとみることができる。「社会に出て集団生活の中で周囲と融和していくようにさせたい」「常識的にふるまっしてほしい」「余り反抗しないように」「人に迷惑をかけないように」などが理由としてあげら

表7-1 規律正しきに対する期待

項 目	例数 n=130	百分率
規律正しい子にしたい	118	90.8
それほどおもわない	12	9.2

れている。このことは現代社会への適応が強く求められていることのあらわれにはかならない。そのために特に気を配っていることは何かと問えば、「あいさつ」「手洗い」「生活時間」「後片づけの励行」などであった。いわゆる規律とは単に常識、礼儀といった外的なものに連なっており、内的な自律性を高めるような方法はとられていないと判断される。

表7-2 食欲の有無と規律正しきに対する期待との関連

項 目	食欲ある n=84		食欲なし n=46	
	例 数	百分率	例 数	百分率
規律正しい子にしたい	78	92.9	40	87.0
それほどおもわない	6	7.1	6	13.0

χ^2 検定
 自由度=(2-1)(2-1)
 5%臨界値 3.841>1.235
 有意差なし

食欲の有無と規律正しきに対する期待との関連は表7-2に示すとおりで、両群間に有意の差はみとめられなかった。

8) 教育方針 (表8-1)

「家庭内でだいたい一致している」と答えたものが70.8%、「一致していない」ものが21.5%、「よく一致している」ものが7.7%であった。

表8-1 教育方針

項 目	例 数 n=130	百 分 率
大体一致している	92	70.8
一致していない	28	21.5
よく一致している	10	7.7

中心となるのは、母68.2%、父母13.6%、父11.4%、祖母4.5%、祖父2.3%であった。乳幼児期における家庭の教育は母親がその中心になっていることが多い。

表8-2 食欲の有無と教育方針との関連

項 目	食 欲 あ る n=84		食 欲 な し n=46	
	例 数	百 分 率	例 数	百 分 率
大体一致している	63	75.0	29	63.0
一致していない	15	17.9	13	28.3
よく一致している	6	7.1	4	8.7

χ^2 検定
 自由度=(2-1)(3-1)
 5%臨界値 5.991>2.187
 有意差なし

食欲の有無と教育方針との関連は表8-2に示すとおりで両群間に有意の差はみとめられなかった。

9) こどもの将来の決定について (表9-1)

「こどもの将来を親が決めようとおもわない」と答えたものが63.8%、「いくらか親の意見を入れたいとおもう」ものが23.8%、「親が決めたたいとおもう」もの3.1%、「わからない」ものが9.2%であった。

表9-1 こどもの将来の決定について

項 目	例 数 n=130	百 分 率
親が決めたたいとおもわない	83	63.8
いくらか親の意見を入れたい	31	23.8
親が決めたたいとおもう	4	3.1
わからない	12	9.2

「親がこどもの将来を決めたたいとおもわない」ものの理由は、「好きなようにしたらよい」「本人まかせ」「こどもの意志を尊重したいから」といった自由放任型が多くみられた。続いて「思ったところでしかたがない」「現代のこどもは親のいう通りにはならないだろう」とい

ったいわゆる自信そう失型が多くみられた。

食欲の有無とこどもの将来の決定との関連は表9-2に示すとおりで、食欲のある群とない群について、 χ^2 検定の結果有意の差が認められた。これは「わからない」という項目において、両群間に差が大きかったためと考えられる。

表9-2 食欲の有無とこどもの将来の決定との関連

項 目	食欲ある n=84		食欲なし n=46	
	例 数	百分率	例 数	百分率
親が決めたいとおもわない	56	66.7	27	58.7
いづらか親の意見を入れたい	23	27.4	8	17.4
親が決めいとおもう	2	2.4	2	4.3
わからない	3	3.6	9	19.6

χ^2 検定
 自由度=(2-1)(4-1)
 5%臨界値 7.815<9.439
 有意差あり

このように育児に対する母親の信念のなさが、その場、その場の事象についてのみ処理していく態度を形成しているとみることができよう。

10) 友だちとの関係における不安感とこどもの将来に対する親の関与との関連 (表10)

友だちとの関係における不安感ありの群では、親がこどもの将来について決めたいと思わないものは54%であり、不安感なしの群では73%であった。親の意見を入れたいものについては、不安感ありの群では46%、不安感なしの群では27%であった。

表10 友だちとの関係における不安感とこどもの将来に対する親の関与との関連

項 目	不安感あり n=24		不安感なし n=86	
	例 数	百分率	例 数	百分率
親が将来を決めたいとおもわない	13	54	63	73
親の意見をいれたい	11	46	23	27

χ^2 検定
 自由度=(2-1)(2-1)
 10%臨界値 2.706<3.173
 有意差あり

χ^2 検定の結果は、10%以下の危険率で有意の差が認められた。

このことは、不安感なしの群では、こどもの将来について、自由に任せるものが多いのに対し、不安感ありの群では、こどもの将来について、親が関与したいと願っているものが多いといえよう。

11) こどもが心身ともに健康に育つための条件

この条件として「環境」「両親の愛情」「夫婦および家庭内の融和」「こどもとの触れ合い」「栄養」「睡眠」「ある程度のきびしさ」「自由にあそばせる」などという理想的なことをほとんどのものがあげている。

しかし、生活の場面の中での育児態度をみれば、以上のべてきたように、かならずしもこれらの条件が裏づけられているとはかぎらない、場面ごとに単に対応するのみであったり、あるいは、母親自身が行なっている育児方法が、こどもにどのように役立つものかといった考えもなくなされていると推察される。これらのことから一貫性のある育児態度がのぞまれるところである。

母親の育児態度および育児方法と食欲の有無の関係をみるために、差の検定をこころみた結果、「発育と栄養との関連づけ」および「こどもの将来の決定についての親の関与」において有意差が証明された。その他の方法に関する諸条件では、有意差は証明されなかった。このことは、「発育と栄養との関連づけ」および「こどもの将来の決定についての親の関与」は基本的な態度をあらわすものであり、その他の諸条件、すなわち、「乳の与え方」「友だちの選択」「あそび用具のととのえ方」は、育児上の方法にすぎないので、方法の一つ一つとは直接的な結びつきはみられなかったものとおもわれる。

母親が「発育のためには栄養を積極的にとらせるべきだ」という態度に立つ場合には、乳の与え方にもみられるように個人の食欲や摂取量などのリズムを基調とした栄養法が理解されていないことが多い。

ここにおいて母親の誤まった関心をいかにして本質的なものにむけるかが問題となろう。

したがって、栄養指導にあたる場合には、これまで一般になされてきた単なる数量的な指示、標準値に固執するような手法はさけられなければならない。また、母親の関心のみをあおるような指導方法に陥らないよう注意が肝要である。

規律正しさを求めている母親が非常に多くみられたが、これはワトソンの説による育児法に影響を受けたものと考えられる。

ワトソンはパブロフの条件反射説を反射以外の行動にまで拡大し、条件反射説をたてた。彼は人間の性格をS-R結合（S=刺激、R=反応）によって形成された無数の「習慣の束」であると考えた。たとえば偏食、習慣、身振り、くせなどの行動傾向は幼少の頃からの生活史における条件づけによって根深く形成されるものだと説いた。たとえば乳児が泣いたからといってすぐ抱き上げると、そこに条件づけが成立し、乳児は泣くという反応と、抱いてもらうということの結合を学習するというものであるとし、また早期離乳を主張し、乳児の哺乳、睡眠、排泄などは時間的に条件づけられるために、時間ぎめの保育が必要であるとした。わが国における現在の育児法は、彼の理論をとり入れたものである。

なお、学習心理学においては、あらゆる行動は興奮状態を除去する方向、すなわち緊張からくる不快を緩和するような動因解消の方向に傾くという仮説がたてられている。

マズローはこの動因解消の傾向性に対して「欠乏動機」と呼んでおり、健康な人間の行動はこれ以外に「成長動機」にもとづいていると主張した。すなわち、健全な人間の場合には、基本的衝動の目標は緊張の解消にあるのではなく、自己を高め実現しようとするところにあるのである。自己を実現するのに必要な予備条件をととのえるための手段として、飢え、疲労などの動因を解消することが行なわれるのであるとした。

要するに、学習心理学は成長動機が優位をしめている健康な人にとっては、その周縁的行動を説明しているにすぎない。その中心的行動に関しては無視しており、健康を促進するという立場からはとらえられていない。

ワトソンの学説を背景にしている育児法においては、ともすれば目先の学習（しつけ）にとらわれて、小児の成長しようとする衝動を無視してしまうことが多い。

これらのことから子どもから成長の芽をつんでしまうことのないような指導こそ必要であると考えられる。

真の母親教育のためには、栄養指導者自らが「小児の健康とは何か」を問い直し、健康観を自立することからはじめられなくてはならない。

参 考 文 献

伊藤英夫，1969. 母子保健指導 (2).

厚生省児童家庭局母子衛生課，1946. 小児保健研究 No.1.29. P.258.

高野陽他，1971. 大都市における母親の育児態度に関する研究第1報地域別にみた育児環境，
日本総合愛育研究所紀要第6集 P.87~95.

高野陽他，1971. 育児に関する調査，母の年令と育児態度について，小児保健研究
No.1.29. No.5. P.208~217.

マスロー著，上田吉一訳，1964. 完全なる人間，誠信書房.